

タイトル：2025 年度 教育セミナー（第 21 回）

日時：2025 年 9 月 18 日（木）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

「インドネシアの寛容なイスラームとはなにか？」

岡本 正明（京都大学東南アジア地域研究研究所）

ムスリムが多数派であるインドネシアでは、インドネシアのイスラームは中東のイスラームと違って寛容であるといった語りがよく聞かれている。それでは、このインドネシア（特有？）のイスラームとは何なのであろうか。本当に寛容なのだろうか。こうした点について本講義では考察した。

インドネシアのイスラームとして一般によく聞かれるのは、穏健で寛容で（非暴力的な）イスラーム、中東やアラブの保守的なイスラームとは異なるイスラーム、他宗教と共存するイスラーム、現地の文化に適応したイスラームといったものである。また、20 世紀後半にインドネシアが民主化してからは、民主主義体制に適合的なイスラームといった語りもよく聞かれる。

インドネシア・イスラーム論に対しては、インドネシアにおけるイスラームの歴史的展開から批判する研究や現代的な立場から批判する研究も存在する。実際、21 世紀に入ってインドネシアが民主化してからは、2002 年のバリ島自爆テロを典型とするようなイスラーム過激派による（自爆）テロ事件、カリフ制実現を目指すインドネシア・イスラーム解放党の党勢拡大、ISIS 支持者・参加者の増加など、インドネシア・イスラーム論で語られるイスラームに当てはまらない動きが見られた。ファン・ブルイネッセン(van Bruinessen)は、こうした変化を「保守化」(conservative turn)と名付けた。インドネシア・イスラーム論に最も当てはまる立場を有するインドネシア最大のイスラーム社会組織であるナフダトゥル・ウラマーについても、その支持者が必ずしも寛容とは言えないというサーベイ調査結果が出て、大きな話題になった。

2010 年代に入ると、イスラームの「保守化」に対して、国家がイスラームの穏健化を図る試みを始めただけでなく、ナフダトゥル・ウラマーやムハマディヤ（インドネシアで二番目に支持者の多いイスラーム社会組織）が穏健で寛容なイスラームを強調しはじめた。ナフダトゥル・ウラマーは、ヌサンタラ・イスラームという表現を使って、現地文化に適応した穏健で寛容なイスラームを主張し始めた。ヌサンタラとはインドネシアの雅語的表現である。2014 年から 10 年にわたって大統領を務めたジョコ・ウィドドは、ヌサンタラ・イスラームを積極的にアピールしていき、2019 年にはナフダトゥル・ウラマーのリーダーを自分の副大統領に据えた。こうした国家と社会の両方から穏健・寛容なインドネシア・イスラームの復権が試みられた結果、インドネシアにおいては、イスラーム国家樹立を目指すような運動の勢いは弱体化し、サラフィー主義の組織のなかには厳格なイスラーム解釈

よりも現地文化に適応したイスラーム解釈を強調する動きも見られはじめた。

こうした変化を見てみれば、インドネシアのイスラームは、「保守化」の危機(?)を乗り越えて、一般に語られる寛容な・穏健なインドネシア・イスラーム論が言説としても実践としても(再び)受容されたということになるのかもしれない。仮にそうだとした場合、寛容なイスラームという名のもとで、国家はイスラーム解放党を解党処分し、共産主義については原理的に許容していない。また、現地文化は、あくまでもイスラーム規範にかなった現地文化でしかない。例えば、歴史的に存在し、必ずしも否定されてこなかった性的マイノリティの存在は否定されている。国家と結びつきを強めて利権を獲得したために、ナフダトゥル・ウラマーは政権の汚職に目をつぶり、幹部が汚職に関与している疑惑さえ出てきている。寛容なイスラームを喧伝しながら、インドネシアの脱民主化を促進しているともいえる。講義では、こうした点についても考える必要性があることを強調した。